

現代欧米のチベット仏教

田中公明

一 欧米におけるチベット仏教ブーム

近年欧米では東洋思想がブームを迎えているが、その中でもチベット仏教の流行には目を見張るものがある。

一九五九年のチベット動乱から文化大革命にかけての時期、チベットの仏教文化は壊滅的な打撃を受けた。チベットでは多くの寺院が破壊され、多数の僧侶・知識人が、信教の自由を求めて国外に逃亡した。しかしダライラマ十四世が指摘したように、一連の悲劇は、

優れた人材や知識の国外流出をもたらし、世界各地でチベットへの関心呼び起こしただけでなく、チベット仏教が国外に広く伝播する端緒ともなった。

国外に逃れたチベット仏教各派の指導者は、まずインドやネパール、ブータンなど、チベットに近いインド亜大陸の各地に逃れ、それぞれの定住先に本山を再興した。国外に脱出した僧侶たちも、かつて所属していた宗派の寺院に身を寄せ、亡命二世や、新たに国外に脱出してきた後進を指導するようになった。そして一九七〇年代に入ると、彼ら国外に逃れた指導者の中

から、欧米開教に成功し、多数の信徒を獲得する者が現れた。

筆者は一九九三年、オックスフォード大学のスポールディング財団客員研究員に選ばれ、ヨーロッパにおける仏教の現状に触れることができた。このうちロンドンの「英国仏教協会」は、超宗派の団体で、テラヴァーダ仏教や禅のコースもあつたが、チベット仏教の講座が最も多かった。

また留学期間がダライラマ十四世の英国訪問と重なったため、これに関連する仏教関係の催物も多数見学することができた。とくにロンドン郊外にあるウエンブレイで開催された、ダライラマ十四世の講演会は圧巻であった。ウエンブレイは、東京でいえば見本市が開かれる晴海や幕張のような所だが、当日はヨーロッパ各地から多数の聴衆が詰めかけ、武道館クラスの大ホールが満員になった。またホールの周囲には、チベット関係の展示会、書籍や物品の即売コーナーも設けられ、多数の来客でごった返した。

会場には、ヨーロッパ在住のチベット難民の姿も見

られたが、ヨーロッパ各地から集まった現地人の方が圧倒的に多く、チベット式の袈裟をまとった僧尼の姿も、多数目撃された。キリスト教の本拠地ヨーロッパに、これだけの仏教徒が存在することは、少なからぬ驚きであつた。

ヨーロッパ宗教界の頂点に立つローマ教皇が仏教に言及する時、念頭に置いているのは中国・日本の仏教やテラヴァーダ仏教ではなく、チベット仏教だという話を耳にしたことがあるが、ヨーロッパにおけるチベット仏教の隆盛を見ると、これもあながち誇張とは思われない。

いっぽう筆者は、一九九八年にインディアナ大学で開催された国際チベット学会に参加し、その帰途、サンフランシスコの周辺で、現地のチベット仏教を調査する機会に恵まれた。

そこで今回は、近年欧米でブームを迎えているチベット仏教について、簡単にレポートしてみたい。

二 チベット仏教流行の秘密

一九五九年のチベット動乱によって仏教指導者が国外に亡命してから四十年、キリスト教が文化の基盤をなす地域で、わずか一世代の間に人々の心を捉えたチベット仏教の魅力とは何なのだろうか。筆者は、チベット仏教の急速な欧米伝播を可能にしたものは、密教の存在であると考えている。

チベットは、かつて自らの宗教をモンゴルや満州族などの他民族にひろめ、内陸アジアに広大な「チベット仏教圏」を誕生させた経歴を有している。

かつてのチベット仏教の内陸アジア伝播でも、モンゴルなどの遊牧民族は、輪廻からの解脱といった哲学的命題より、現世利益を希求する傾向が強かった。また長らくシャーマニズムを信奉していた彼らは、僧侶に呪術師としての役割を期待した。そしてチベット仏教に伝えられた密教こそ、このような彼らの期待に応えるものだったのである。

そして密教の存在は、チベット仏教の欧米への伝播

にも、大きな役割を果たすことになった。多くの若者は、東洋の神秘への憧れ、エキゾチックな儀礼への好奇心といった動機から入信するが、やがて本格的に勉強をはじめ、チベット人も顔負けの学者となった者もある。かつてヒッピーとしてインドやネパールを放浪し、チベット仏教に出会った若者が、現在は一流の大学にポストを得ているというケースも稀ではない。

チベット仏教には、ダライラマの出身母体であるゲルク派（ダライラマは亡命政権の首長を兼ねるので、各宗派を平等に扱わなければならない）を中心に、カギュー派、サキャ派、ニンマ派という四大宗派がある。ところが欧米では、チベット国内で圧倒的なシェアを誇っていたゲルク派より、密教への傾斜を深めたニンマ派やカルマ派が、一種の新宗教のような感覚で受け入れられている。

なおカルマ派とは、カギュー系諸派の中で最大の勢力を誇る支派で、チベットの歴史に重大な影響を及ぼした転生ラマ制度も、この派が導入したものである。

そこで今回は、とくにニンマ派とカルマ派を中心に、

欧米に根を下ろしたチベット仏教の実態を見てゆくことにしたい。

三 チベット密教のメデイテーション

チベットの仏教をアジアの他の仏教、すなわち中国・日本の大乘仏教や、東南アジアのテーラヴァーダ仏教と明確に区別するものは、九世紀以後インドで急速に展開した後期密教の存在である。そして亡命先の各地で人々を魅了した種々の儀礼や実践も、ほとんどが後期密教系のもので占められている。

後期密教の実践体系は、「生起次第」と「究竟次第」に二分される。

このうち生起次第は、インドの仏教において成立した尊格や曼荼羅の観想つまり視覚的な瞑想と合一の行法が、後期密教においてさらに発展したもので、日本密教の本尊瑜伽や曼荼羅の観想とも共通する点が多い。

これに対して究竟次第は、視覚的な瞑想を用いず、呼吸の制御や身体の特定のポイントへの精神集中などの生理学的方法によって、人工的に神秘体験を創り出

す身体技法である。

生起次第は、わが国の真言密教とも共通する点が多いので、われわれ日本人には理解しやすいが、究竟次第は、日本仏教の通念では理解することが難しい。しかしチベット仏教では、現生で成仏するためには究竟次第の実修が不可欠とされ、生起次第は究竟次第に入る前段階と位置づけられている。

近年はわが国でも、若手を中心に究竟次第の研究がはじまったが、いまだ研究は初期の段階にあるといつてよい。その詳細については、究竟次第の成立史を論じた拙著『性と死の密教』（春秋社）を読んでいただくより他はないが、その要点を述べれば、究竟次第の行法は、仏教の性理論（セクソロジー）や死の理論（タナトロジー）と、深く関わっている。

そしてチベット仏教の四大宗派は、それぞれ究竟次第系の行法を伝えているが、とくにカギュー派の「マームドラー」（大印）と「ナーローの六法」、ニンマ派の「ゾクチェン」（大究竟）は、生理学的ヨーガを含む究竟次第の代表的教法として知られている。

しかしチベットの僧侶なら、誰もが密教を伝えていくわけではない。学識のある高僧でも、究竟次第は不得意だという人も稀ではないし、それほどの学者とも思われないが、究竟次第の達人として有名な行者もいる。

いっぽう最大派閥のゲルク派では、僧院で「ゲシェー」(宗教学博士)の学位を取得したもののだけが、密教学堂に進学して究竟次第を学ぶことを許されるので、究竟次第系の行法は、限られたエリートのためのものになっている。

これに対してニンマ派やカギュー系の諸派では、密教の実修にゲルク派ほど厳密な制約を課していない。そこで神秘体験に惹かれる若者たちは、多くの場合これらの宗派に入門して、修行をはじめることになる。

しかしこれらの宗派に入門したからといって、いきなり究極の奥義を授けてもらえる訳ではない。まず仏教の基礎的な理論を学び、生起次第系のいくつかの教法を受けてから、やっと究竟次第の実修が許されるのであるが、実際にここまでたどり着ける修行者はけっ

して多くない。

なお聞くとくところによれば、チベット仏教の欧米伝播の初期には、諸般の事情により、仏教の基礎理論の講習や生起次第を省略したり、著しく簡略化したりする便法が行われたという。

この点に関して、究竟次第系の行法「ボワ」の達人として評判のある活仏(カギュー派)は、欧米開教当時の事情を、つぎのように語っている。

生まれながらの仏教徒であるチベット人とは異なり、キリスト教が文化の基盤をなす欧米では、現地の人々に、自分たちの実践が明白な効果をもたらすことを、まず示さなければならなかった。そのためには究竟次第系のヨーガが最も有効であり、生起次第を省略することに批判的なダライラマ十四世でさえ、欧米布教においては、やむを得ない便法として黙認していたと。

しかし究竟次第系のヨーガを売り物にすることが、正統派を自認する人々から厳しく批判されたのも事実である。そこでチベット仏教が、欧米で一定の認知を受けるようになった今日では、密教への傾斜が著しい

ニンマ派やカギュー派でも、仏教の基礎理論の講習や、生起次第系の行法に力を入れるようになってきた。

四 カギュー・サムイエーリンを訪ねて

スコットランドのカギュー・サムイエーリン寺院は、前述のチベット仏教カルマ派に属し、チベット仏教欧米開教の草分け的存在として知られている。

この寺は、イングランド最北端の都市カーライルからスコットランド側に一山越えた、ダンフリースシャーのエスクデイルミュールという一寒村にある。

同寺は、チューギヤム・トゥルンバ、アコン・リンポチュエという二人の亡命チベット人活仏によって、一九六七年に創建された。当初は微々たる教団に過ぎなかったが、現地でしだいに信者を獲得し、やがてヨーロッパ初の本格的チベット仏教寺院へと成長していった。

その後チューギヤム・トゥルンバはアメリカに渡り、今はアコン・リンポチュエのみが寺を守っているが、現在では還俗して、チベット伝統医学に基づくカウンセセリ

ングや、中国領内に残留するチベット人の支援活動に多忙な日々を送っている。そこで寺の実質的な運営や勤行は、ほとんどヨーロッパ人のスタッフによって行われている。

寺には出家の僧侶と尼僧、一定期間寺に起居して種々の行事に参加する男女のボランティアがいる。彼らのある者はコックとして食事を作り、ある者は参拝客を宿泊させるドミトリの管理や送迎用タクシの運転手、ある者は大工として寺の増改築、またある者は仏師や仏画師として寺に納める仏像、仏画の製作というように、各自の能力に応じてコミュニティに貢献している。

男女の僧尼が一つの寺で一緒に修行することは、チベットでは許されないし、寺の菜園で作った野菜をふんだんに用いる自慢のヴェジタリアン精進料理も、チベットの僧院食とは似ても似つかないメニューである。

そもそもチベット人は肉食が大好きで、僧侶も、いわゆる「三種の浄肉」は食べても構わなかった。したがってサムイエーリンの精進料理は、スコットランド

で新たに開発されたものといえる。

また寺では、種々の仏教講座を設けている。とくに現在のカギュー派の基礎を築いたガムボパの名著『解脱の装飾』(タルギエン)の講座は、現在の住職(英国人)がこのテキストを英訳したこともあり、頻繁に開催されていた。

また講座の日程が、クリスマス、イースターといったキリスト教のカレンダーに従っていることも驚きであった。「クリスマスに『タルギエン』を学び、イースターに観音を修する」というのが、この寺の流儀なのである。

またアコン・リンポチエがチベットの伝統医学に造詣が深かったため、寺では仏教やチベット医学のみならず太極拳、マッサージ、指圧、アロマセラピーなど、さまざまな東洋の伝統療法の普及にも力を入れている。このような包容力と柔軟性も、この寺が、人種も風土も違う英国に根づいた理由の一つであろう。

このように寺は、欧風化した環境の中で、よく組織された現地人によって運営されている。もしチベット

人が去っても、寺は彼らによって将来も存続するように思われた。

五 リクバとソギヤル・リンポチエ

いっぽうチベット仏教ニンマ派に属するリクバ(明知)は、ロンドンのキングズクロス駅から北に延びるカレドニアロードにあった。

寺を訪れて気づいたのは、入口は狭いのに中が広く、市街地の寺院としては規模が大きいということである。金ピカに飾りたてられた仏壇や真新しいタンカ(チベットの軸装仏画)は、豊富な資金力を物語るもので、筆者の訪問時には、さらなる増築改修さえ行われていた。

この寺は、ソギヤル・リンポチエという亡命チベット人活仏によって、一九八一年に創建され、現在はロンドンの他、世界十四カ国に支部をもつ大教団となっている。創立者は東チベットの出身で、インドに亡命した後デリー大学でインド哲学を学び、さらにケンブリッジ大学で比較宗教を修めるなど、亡命チベット人の間でも屈指の学歴を誇るインテリである。

またソギヤル・リンポチエには、ニンマ派の専売特許である「ゾクチェン」の入門書の他、*The Tibetan Book of Living and Dying* という著書もあり、最近日本でも、『チベット生と死の書』と題する邦訳が出版された。

ニンマ派のゾクチェンには、人間の死のプロセスをシミュレートするヨーガがある。有名な『チベット死者の書』も、このような伝統の産物であるが、欧米では最近、このようなメデイテーションをターミナルケアやホリスティクスに応用できないかということ、社会的関心が高まっている。

ソギヤル・リンポチエは、ゾクチェンの実践者でありながら、近代的な大学教育を受けた最初のチベット人世代に属している。欧米のインテリを相手に、東洋の伝統的メデイテーションと西洋の近代医療の融合というトピックを語るには、まさに適材であったのだらう。

しかしリンポチエが世界各地を飛び回っているため、活仏の留守中は、寺も閉められていることが多かった。

このような事実も、活仏のカリスマ性への依存度が高い、チベット仏教教団の実態を反映するものといえよう。

六 リコン・インステイユート

いっぽうリコンは、スイス銀行の本拠地チューリッヒの郊外にある美しい田舎町である。オックスフォード留学を終えてチューリッヒに飛んだ私は、世界で最も正確といわれるスイス国鉄に乗って町に着いたが、寺の場所がわからない。近所に東洋人とおぼしき子供たちが遊んでいたので声をかけたところ、チベット難民の二世であった。近くにはチベット難民の入植地があるらしい。

子供たちの両親に道を尋ねたところ、寺は山の中にあった。寺に向かう途中、テスという小川に架かる橋を渡ったら、川底にタイルの曼荼羅がはめ込まれているのが見えた。

このインステイユートはダライラマ十四世によって設立された。宗派はゲルク派とサキャ派の兼学で、

一九六八年のオーブニング・セレモニーには、ダライラマの養育係（ヨンジン）を務めた二人の高僧も臨席したという。

またこの寺は一九八五年、ダライラマ十四世が、ヨーロッパで初めて「時輪の大灌頂」を親修したことも知られている。

『時輪タントラ』は、インドで最後に出現した後期密教聖典である。そしてこの密教聖典は、他に類を見ない入門儀礼「時輪の大灌頂」（トゥンコル・ワンチェン）を説いている。これは広く信者一般に、生起次第実修の許可を与えるもので、数多いチベット仏教の儀礼の中でも、最も大規模なものといえる。この「大灌頂」では、『時輪』の華麗な砂曼荼羅が製作され、特殊な宗教舞踊が実演されるなど、アトラクシヨンの要素にもこと欠かない。

なお歴代のダライラマは、一世一代の盛儀として、ラサのポタラ宮で「時輪の大灌頂」を行ってきた。ところが一九五九年のチベット動乱以後、ダライラマ十四世は、国外に離散した亡命チベット人のために、世

界各地で「時輪の大灌頂」を行うようになった。

そして一九八一年に、ダライラマが国外で初めて、アメリカのウイスコンシン州マディソンで行った「大灌頂」は、アメリカの人々にチベットへの関心を喚起するのにかつこうのパフォーマンスとなった。いっぽう一九八五年のリコンの大灌頂は、ヨーロッパにチベットブームをもたらした。

そしてテス川の川床に沈められたタイルは、ダライラマ十四世がここで「時輪の大灌頂」を親修した後、役目を終えた砂曼荼羅を川に流したことを記念するプレートだったのである。

私が寺を訪ねた時、住職のゲンドウン・サンポ師（故人）は、私を親切に迎えてくれたが、英語が不得意なばかりか、チベット語もアムド（北部チベット）方言だったので、コミュニケーションには非常な困難を感じた。

かつてスイスには、欧米人の弟子を多数養成したゲシェー・ラプテンがおり、ヨーロッパでもチベット仏教の先進地という趣きがあった。私が訪れた時も、寺にはゲシェー（宗教学博士）の称号をもつ学僧が数名い

たが、夏休みであったこともあって、どこか閑散としていて活気が見られなかった。

一九五九年のチベット動乱後、スイスは、人道的見地から多数のチベット難民を受け入れた。しかしヨーロッパでも屈指の豊かな国に安住し、現状に満足したチベット人は、世界各地で苦勞している同朋のことを忘れてしまったという陰口も聞こえてきた。

七 ニンマ・インスティテュートを訪ねて

このように私の留学したヨーロッパには、いくつかのチベット仏教教団があり、旺盛な活動を続けていた。しかしチベット仏教の流行という点では、アメリカ、とくにその西海岸にめざましいものがある。そこでこれからは、私が一九九八年夏に調査した、アメリカのチベット仏教教団を見ることにしよう。

風光明媚なサンフランシスコ湾をはさんで、サンフランシスコ市の対岸にあるバークレーは、カリフォルニア大学本校（UCBA）の所在地として有名な学園都市である。またこの町は、環境問題や障害者の社会参

加など、多くの実験的プロジェクトを世界に先駆けて実施したことで知られている。

アメリカでも有数の規模を誇るチベット仏教団体、ニンマ・インスティテュートは、UCBAのキャンパスを望む高台にあった。

この教団は、タルタン・トゥルクという亡命チベット人によって、一九七三年に創立された。創立者は、アムド（北部チベット）のゴロク出身の活仏で、チベット動乱が勃発した一九五八年（ダライラマ亡命の前年）に、シッキム経由でインドに逃れ、ベナレスのサンスクリット大学で仏教を講じた後、一九六八年にカリフォルニアに渡った。その後トゥルクは、デルゲ版『チベット大蔵経』の復刻や、ブツダガヤで「世界平和祈念祭」を開催するなど、旺盛な活動で知られている。

いっぽうトゥルクは一九七五年に、サンフランシスコから北に百二十マイルほど離れた郊外に、オディヤン・リトリートセンターを開設した。私が訪れた時も、トゥルクはオディヤンでリトリートに入っており、会うことはできなかった。

いつばうインステイテュートには、世界各国から四十人ほどの修行者が集まっていた。学監のラルフ・マクフォール氏によれば、インステイテュートは現在までに、世界三十カ国ほどから修行者を受け入れたとのことである。

インステイテュートには、仏壇や勤行堂、図書室など、通常のチベット寺院に見られる施設の他に、よく整備された瞑想用の庭園が設けられていた。

学監によれば、この庭園は特定のヨーガを実修するためのものではないとのことである。またインステイテュートでは仏教の基礎理論など、一般的な講座に重点を置き、ゾクチェンなどの高度な教法は授けていなかった。

これはカギュー・サムイェーリンでも、日常の勤行は生起次第系の行法で、高度なメディテーションは、部外者が立入禁止のリトリートで行われていたことに似ている。

またインステイテュートは、仏教以外の宗教家や生理学者、医者、社会学者などと共同で、チベット仏教

を現代に活かすプロジェクトを推進している。これもUCBAの門前町として、アメリカでも有数の知性を誇るパークレーならではの活動といえる。

先に紹介したアコン・リンポチェは伝統医学に造詣が深かったが、タルタン・トゥルクはチベットの気功「クムニエ」の権威者として知られ、英語の概説書も著している。またタルタン・トゥルクから「クムニエ」を学んだ日本人が、岐阜県で、日本初のチベット仏教寺院の建立を計画しており、この教団が日本に上陸する日も、さして遠くないことのように思われる。

八 カギュー・ドデンクンチャブ

サンフランシスコ近郊では、この他にもかなりのチベット系仏教団体が活動している。その一つカギュー・ドデンクンチャブ(KDK)は、サンフランシスコ市内の住宅地にあった。筆者が留学中に訪ねたオックスフォードのカルマ派寺院、タングーハウスと同じく、一般の民家を改造して寺院としたので、室内はいかにも手狭だが、仏壇や勤行用の座席の他、小規模ながら

図書コーナーや物販カウンターも設けられていた。

この寺は一九七四年に、カルマ派の長老カル・リンポチェ(故人)が創建したが、現在はラマ・ロドゥーチ・ユンペル師が指導している。なおラマ・ロドゥーチは、チベットの女性密教行者マチク・ラブドゥンマが創始した究竟次第系の行法「チュー」の名人といわれる。

サムイェーリンと同じく、朝晩の勤行は大黒天(マハーカーラ)や観音を本尊とするもので、チベット語が読めない信者のために、英語による勤行も行われていた。また日曜日には、とくに緑色ターラー菩薩のお勤めが行われる。

いっぽうこの寺も、リトリートの専用道場を郊外のメンドシノ郡に設けている。また一九九六年から三年間に互る長期のリトリートが、五名の僧侶と五名の尼僧によって行われていると聞いた。残念ながらその模様は取材することができなかったが、KDKが撮影した写真によると、参加した十名の僧尼はいずれもアメリカ人(白人)のようである。

九 シャンバラ(ヴァジュラダートウ)

この他にもパークレーには、シャンバラという別のチベット仏教団体もあった。残念ながら担当者が不在で取材ができなかったが、パンフレットによれば、前述のチューギヤム・トゥルンパが創立したカルマ派系の教団のようである。

なお創立者は、カルマ派のトゥルンパという名跡の活仏の十一代目で、法名がチューギヤムツォだったもので、これを略してチューギヤム・トゥルンパと称した。英国に亡命してサムイェーリンを創建した後、アメリカで開教に成功し、『タントラへの道』などの著書で名声を博したが、すでに故人となっている。

本山はカナダのノバスコシアにあり、私が訪ねたパークレーの事務所は、北米大陸に展開する支部の一つと思われる。正式な教団名はヴァジュラダートウ(金剛界)というが、『シャンバラの太陽』(公称一万部)という機関誌を発行しているので、一般にはシャンバラの名で知られている。

なお私はカナダを訪れたことはないが、現地で通訳を務めたオックスフォードの友人の話によれば、この教団には毎日朝礼があり、メンバーが隊列を組んで教団旗を掲揚し、教団歌を斉唱することである。ちなみにチベット人は、大陸浪人の矢島保治郎がダライラマ十三世の依頼で軍隊の教練をするまで、隊列を組んで行進するということを知らなかった。シャンバラ教団の朝礼は、サムイェーリンのヴェジタリアン精進料理と同じく、仏教教団の欧米化を示す事例として興味深い。

また教団は現在もチューギヤム・トゥルンパを精神的支柱としているが、カルマ派が彼の転生者と認定したトゥルンパ十二世を指導者とは仰いでいない。じつはチューギヤム・トゥルンパは、アメリカで還俗し妻子をもっていた。そして現在、教団では彼の子息が重きをなしているため、先代の転生者は歓迎されないらしい。

チューギヤム・トゥルンパは、禪の「十牛図」を説教に用いるなど、伝統にとらわれない自由な布教活動

を行ったといわれる。教団がいち早く現地に根づき、独自の道を歩みだしたのも、このような教祖の思想と無関係ではないだろう。

このようにシャンバラは、カルマ派に属してはいるが、現在もルムテク（シツキム）の総本山と密接な関係にあるKDKとは異なり、非常にアメリカナイズされた教団といえるであろう。

十 欧米におけるチベット仏教の未来

以上本稿では、近年欧米でブームを迎えているチベット仏教の実態について、簡単にレポートしてみた。残念ながら筆者が調査したのは、欧米のチベット仏教団体のうちのごく一部に過ぎず、担当者が不在で取材ができなかったところもあった。しかしこのレポートだけでも、チベット仏教がどのように欧米に伝播し、どのように浸透していったか、おおよそ明らかにすることはできたであろう。

いままで見てきたように、チベット仏教の欧米伝播は、ヨーガの神秘体験やエキゾチックな宗教儀礼に対

する興味を、その大きな原動力としていた。それはちょうど、映画『インディージョーンズ』に出てくるヒマラヤ奥地の怪しげな僧院——あのシーンはルムテクのカルマ派総本山で撮影されたらしい——のイメージといつてもよいであろう。

ところがダライラマのノーベル平和賞受賞に見られるように、チベット仏教は欧米において、一定の評価を受けるようになってきた。いっぽうチベット仏教の側も、欧米人に対し、究竟次第系のヨーガを売り物にする姿勢を改め、仏教の基礎理論の講習や生起次第系の行法に力を入れはじめている。

しかし欧米開教に成功した亡命チベット僧の多くが、究竟次第系のヨーガの心得をもつ活仏であったことも事実である。今日彼らは、究竟次第系の生理学の知識を活かしつつ、現地人の嗜好に応じて、気功やマッサージ、指圧、アロマセラピーからターミナルケアまで、布教の一助として取り入れはじめた。

これらの新機軸も、彼らの活動を快く思わない人々の目には、一種のマヌーバーと映るだろうが、このよ

うな柔軟性こそ、チベット仏教が今日の欧米で一定の地歩を確保できた秘密のように思われる。

いっぽうチベット仏教の欧米開教は、インドやネパールに逃れた一般のチベット難民にも、余得をもたらしている。現在、インド亜大陸の各地に入植した難民の中には、一人あたりの個人所得が平均より多い者も少なくなく、現地人の羨望が、排斥運動に発展しかねないとの懸念も生じている。

また欧米でも、チベット仏教が、現地の保守的な人々の反感を買うという事例が起きている。アメリカのあるチベット仏教寺院が、アジア系に反感をもつベトナム帰りの元米兵に焼き討ちされたとの話もある。また英国では、アンドルー王子と離婚後、悩みをかかえたセーラ元夫人が、ダライラマに会ってチベット仏教に傾倒するようになり、王室関係者を心配させていると聞いている。

ダライラマ十四世は、『新千年期に向けての倫理』の中で、「私にとって仏教は無上の道である。しかし万人にとって最上のものである必要はない」と語った。こ

の発言も、単に宗教的寛容を呼びかけたものではなく、亡命先の諸国において、無用な軋轢を避けようとの意図があったと推測される。

なおチベット仏教とくにゲルク派は、大乘仏教とはいっても、大小乗・顕密の仏教を包括する総合仏教の立場に立っている。そのため全人類が、速やかに実善の一乗に帰すべきだというような観念には乏しい。小乗の信者はテラヴァーダ仏教でもよいし、キリスト教やイスラム教も、それが世界の平和と人類の福祉に貢献するなら、「人天乗」として許容されるとの思想がある。したがってチベット仏教には、「辻説法」や「折伏」といったような実践はない。

ダライラマの上記の発言も、欧米開教という新しい展開をふまえて、このようなチベット仏教の立場を、改めて表明したものといえよう。

このように欧米では、チベット仏教が、チベット難民という枠を超えて、現地の人々の間に浸透しはじめている。しかしその勢力は、キリスト教の圧倒的な力には比すべくもないばかりか、近年アメリカで黒人の

間に信徒を拡大しているイスラム教と較べても、微々たるものに過ぎない。

しかし私が出会った数名の欧米人仏教徒からは、チベット仏教が、知的にかなりのレベルに達した人々に受容されていることが見て取れた。

インドにおける仏教復興においても、スリランカから大菩提会（マハーボーデー）の布教が行われた時には、それに応じるインド人はほとんどおらず、ごく少数の人々が入信したに過ぎなかった。しかしこの少数のインド人の中には、ラーフラ・サンクリトヤーヤナやジャガディッシュ・カーシャプのような、偉大な落ちこぼれともいべき知的エリートが含まれていた。

そして彼らの活動が、ついにはアンベドカル博士の指導による被差別カーストの集団改宗につながっていたのである。

チベット仏教の欧米布教は、現在やつと一世代を経たばかりで、いまだ初期の段階にある。亡命下のチベット仏教は、前に紹介したダライラマの発言にも見られるように、チベットをめぐる政治情勢にも左右され

るため、その未来像はなかなか見えてこない。しかし伝統的なキリスト教的価値観になじまない人々に受容された仏教が、将来は大衆的な広がりを見せる可能性も、ゼロではないと思われる。

英国人だからキリスト教徒、日本人だから仏教徒という時代は、近い将来終焉を迎えるであろう。それぞれの個人が自らの価値観に基づき、宗教（無宗教を含む）を選択する時代の到来が迫っている。

新世紀を迎えた世界で、チベット仏教はどのような役割を果たすであろうか。ここしばらく、チベット仏教の動向からは目が離せないように思われる。

（たなか きみあき／東方研究会研究員）

（本稿は、二〇〇〇年十月より三回にわたって行われた講演内容に加筆いただいたものです。）